
風船の夜

早良敦司

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

風船の夜

【著者名】

早良敦司

N4547D

【あらすじ】

月の下を虚ろに、あてもなく、独り、彷徨う。孤独。満たされない感情。

午前、一時。仄かに蒼い空氣の中を、ふわふわ泳ぐ。

ふわふわ。ふらふら。煙みたいに、ゆらゆら、歩いていた。

自販機の白が、眼に痛い。

車の音が酷く五月蠅い。

歪んだ空氣がキモチワルイ。

きしきしきしんでいる空。心地よい蒼の闇は、此処にはない。

見上げると、そこには、空を吸い込んでいくような赤い月。

貴方も食えているの？何を求めるのかも解らないまま、流されいく私のよう。

ぐるぐると回つて賞賛。ああ、今日の月は、なんて綺麗なんだろう。欠けたる事もなき望月。永久に輝き続ける、狂氣の象徴よ。

叶うなら、せめて憐れみを。私に、一片の狂いを。

どくん。後頭部で、心臓が跳ねた。私の体は空っぽだから、もうどうでもいい。

私の一揃いの呼吸機関。それは肺、それとも鰓？そもそも、私は、普段呼吸なんかしてたのかな。

わからない。どうやって、私は呼吸してたんだ？。何故、私の体は、こんなに空洞なんだろう。

息を吐いても、吐き続けても、まだ、私の中に空氣が。わからない。誰か、私に呼吸の方法を教えて。

私の中に溜まつていく空氣。喉の奥に絡みついた粘体。温い酸が胃からせり上がり、口を満たす。耐えきれずに、アスファルトの上に撒き散らした。

吐いて、吐いて。枯れるまで、何度も何度も繰り返して、痙攣が止まらなくなつたら、内臓まで吐き出してしまうかもしれない。体の中は空になつて、空気だけが溜まつていく。

今なら多分、私の体に切りつけても血は出ない。
夜になるたび、私は流れゆく。

月を見ても狂う事なんて出来ない私は、ただ、流れるしか……

(後書き)

月を題材とした掌編小説で、「風鈴の夢」と対になる作品です。

古くから、満月は人を狂わせる力があると言わされてきました。

日本ではあまり馴染みがありませんが、狼男、人狼の伝説などはその好例でしょう。

私は日が落ちてから散歩するのが趣味の一つのですが、地上低くを漂う赤茶けた満月を見て

ふと、感動こそすれ、そこから何の変化も、何の力も得られぬ自分に恨めしさを感じました。

この作品は、そんな想いから生まれています。

また少し違った想いを込めた「風鈴の夢」と、併せてご覧になつていただければ幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4547d/>

風船の夜

2010年12月26日02時23分発行